

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24310179

研究課題名(和文) 東アラブ地域の非公的政治主体に関する総合的研究：「アラブの春」の政治変動を中心に

研究課題名(英文) Comprehensive Study on the Non-formal Political Actors in the Arab East

研究代表者

青山 弘之 (Aoyama, Hiroyuki)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：60450516

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「アラブの春」と呼ばれるアラブ世界での政治変動のもとで台頭・再活性化した「非公的政治主体」に着目し、その営為が東アラブ地域諸国の政治にどのような影響を与えているかを解明することをめざした。

研究期間中に研究分担者らが実施した現地調査、情報収集においては、近年の東アラブ地域諸国の政治の動静を、「民主化」や「テロとの戦い」といったパラダイムのなかに押し込めて捉えるのではなく、「非公的政治主体」の営為を綿密に把握することに特に力点を置いた。そして、研究の結果、国家機能を補完することを期待されていたはずの「非公的政治主体」が、国家機能のさらなる弱体化を招いていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In this study, we looked into the 'unofficial political actors' that came into power and regained impetus under the political turmoil of the Arab world called 'the Arab Spring', and aimed to elucidate what influences their activities were giving to the politics of the Eastern Arab countries.

In the field researches and information gathering each of researchers conducted, we focused on accurately understanding the activities of 'unofficial political actors' instead of seeing the recent political movements in the Eastern Arab countries confined in the paradigm of 'democratization' and 'war on terror'. And as a result of the study, it was revealed that the 'unofficial political actors' that were hoped to complement the countries' national functions ended up rather weakening them further.

研究分野：複合新領域

キーワード：地域研究 西アジア・北アフリカ アラブの春 テロとの戦い イスラーム国 アル=カーイダ

1. 研究開始当初の背景

2011年1月のチュニジアでの政変に端を発した「アラブの春」は、主にメディアにおいて「独裁」、「強権」から「自由」、「民主主義」への移行の兆しとして高く評価されているが、アラブ・イスラエル紛争を抱える東アラブ地域においてそのインパクトは両義的である。

「民主的」とされる国・地域、ないしは「民主化」の途上にあるレバノンやパレスチナ自治区(イスラエル)は体制転換の可能性を伴うような大規模な反体制運動に直面していないが、権威主義体制を敷くシリアでは政権と反体制勢力との間で非妥協的な対立が続いている。「アラブの春」を「民主化」と評価する立場からすると、こうした事態は東アラブ地域全体が徐々にではあるが「民主化」に向かって変容していると捉えられるものである。

だが、同地域の政治がアラブ・イスラエル紛争(パレスチナ問題)をはじめとする様々な紛争のなかで展開することを余儀なくされているという現実を踏まえ、各国の政治財の供給度合い(Rotberg ed. [2004]などを参照)に着目すると、まったく別の評価が可能となる。すなわち、「アラブの春」の影響が少ない「民主的」なレバノンやパレスチナ自治区が、紛争や内政混乱に苛まれた「弱い国家」としての存在を脱却できずにいる一方で、反体制運動が激しく展開する「権威主義的」なシリアは、これまでの政治的安定が揺らぎ、「強い国家」としての地位を失う危機に直面している、という評価である。

総じて「アラブの春」は東アラブ地域全体をその政治体制のいかんにかかわらず「弱い国家」群(ないしはそれ以下の「失敗国家」、「破綻国家」といった類型に含まれる国家群)へと追いやり、これまで以上に過酷な紛争状態に曝そうとする現象とみなすことができるのである。

このような危機的状況は、民主化論や権威主義体制論の枠組みのなかで東アラブ地域の「アラブの春」を捉えるだけでなく、政治的安定・不安定を左右するような各国の「国家としての要件」にかかわる問題として理解する必要を喚起する。なぜなら、紛争という同地域の常態を前提として分析を進めることで、そこでの「民主化」や権威主義存続を決定づける政治の動態がはじめて明らかになるからである。

「アラブの春」に代表される東アラブ地域の政治変動を政治財の供給度合いの変化と関連づけて見てみると、同地域の政治における最大の特徴である非公的政治主体の営為が「アラブの春」によって(再)活性化されたことに気づく。その最たる存在がインターネットやSNSを駆使して反体制運動を指導・組織したとされる「タンスィーキーヤート」(調整)などと呼ばれた主体である。またそれ以外にも「弱い国家」であるレバノン、

パレスチナでは、ヒズブッラーやハマースといった組織の傘下にあるNGO(末近 [2011]、Roy [2011])が国家の機能不全を補填する、ないしは逆手にとるかたちで、その社会に浸透し、権力を強化し続けている。一方、「強い国家」であるシリアでは当初は「シャブイーハ」(Zaydan [2011])と賞される集団、そして最近では「人民諸委員会」、「国防隊」、「バアス大隊」といった自警組織・民兵組織、秩序維持のために軍・治安機関とともに反体制運動に対峙している。

領域国家の法的・制度的枠組みと領域そのものを超えて活動する非公的政治主体(青山・末近[2009])に関するこれまでの研究は、権威主義体制における軍・諜報機関の役割や対イスラエル武装闘争におけるレジスタンスの組織・活動を主な分析対象とすることで、東アラブ地域各国の政治構造や紛争への関与のありようを解明しようとしてきた。また本研究計画の前身である基盤研究(B)「現代東アラブ地域の政治主体に関する包括的研究：非公的政治空間における営為を中心に」もこうした主体の営為を把握することに重きを置いてきた。しかし「アラブの春」に端を発する政治変動を受けるかたちで非公的政治主体が影響力を増すなか、その実態解明は同地域の政治の動態を把握するうえでこれまで以上に不可欠となっていると考えた。

<参考文献>

青山弘之・末近浩太[2009]『現代シリア・レバノンの政治構造』アジア経済研究所叢書、岩波書店。

末近浩太[2011]「ヒズブッラー 組織体系」(「現代東アラブ地域の政治主体に関する包括的研究：非公的政治空間における営為を中心に」科学研究費補助金(基盤研究 B))
http://www.tufts.ac.jp/ts/personal/aljabal/biladalsham/lebanon/hizbullah_tanzim.htm

Rotberg, Robert I., ed. [2004] *When States Fail: Causes and Consequences*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.

Roy, Sara [2011] *Hamas and Civil Society in Gaza: Engaging the Islamist Social Sector*. New Jersey: Princeton University Press.

Zaydan, Wafa' [2011] "al-Shabbiya .. Balatija al-Nizam al-Suri," *al-Misriyun*, March 31.

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえて、本研究は「アラブの春」を契機に台頭・活性化した非公的政治主体に焦点を当て、その営為が、紛争や混乱によって特徴づけられる東アラブ地域の政治の動静をいかに規定しているのかを明らかにすることをめざした。

非公的政治主体とは、公的な機関(立法府、行政府など)や主権国家の法制度や領域を超越して活動する政治主体を意味する。また東アラブ地域とは、シリア、レバノン、パレスチナ(イスラエル)、ヨルダン、イラクからなる地域を指す。

この目的を達成するため、本研究は以下三つの課題を具体的に設定し、3年間という期間内での研究を通じてその解明を目指した。

第1の課題は、北アフリカで大きな政治変動をもたらした「アラブの春」が、東アラブ地域において「実際のところ」どのように推移し、比較政治学ないしは紛争研究の観点からどう評価されるべきか、という点である。「アラブの春」は「フェイスブック革命」などと称され、インターネットや衛星放送などを通じて多くの情報が提供されている。しかしこれらの情報は、反体制運動寄りのメディアが発信したものであれば、体制寄りのメディアが発信したものであれば、扇動や誇張がなされていることがアラブ世界で問題視されていた。それゆえ「アラブの春」の実態を知るには、歴史学の資料批判にも似たスクリーニング作業をもって一連の情報を精査し、そのうえで民主化論や政治構造論といった観点から評価する必要があると考えた。

第2の課題は、「アラブの春」が、東アラブ地域の非公的な政治空間においていかなる主体を発生、ないしは(再)活性化させたのかを明らかにすることである。東アラブ地域においては、政党、利益集団、官僚、議会、内閣、大統領府など、比較政治学における主要な分析対象である政治主体が制度疲労、または機能不全に陥るなかで、レジスタンスや軍・治安機関が実質的な権力を強めてきた。だが、近年の政治変動、紛争のなかで、こうした旧来からの非公的政治主体に加えて、NGO、シャッビーハ、バルタギーヤ(犯罪集団)、ラジュル・アル=アアマール(為政者と「特権的」な関係を有する実業家)などの台頭がめざましく、これらの集団がどのような人々によって構成され、いかなる営為を行っているかを解明することが「アラブの春」の実態を解明するうえで急務だと考えた。

第3の課題は、これらの非公的政治主体が「アラブの春」に直面した近年の各国内政、そしてアラブ・イスラエル紛争に代表される地域の政治問題においていかなる役割を果たしているのかを分析することである。「弱い国家」に代わって政治財を提供するようになっている NGO(とりわけレジスタンスの傘下組織)や、反体制抗議運動弾圧を主導したシャッビーハは、混乱が絶えない地域各国の国家形成(再編)において決定的な役割を担うだけでなく、地域紛争における当事者としての影響力さえも行使し得る存在である。それゆえ、これらの主体が内外の諸問題にどうかかわるかは東アラブ地域の政治そのものの動向を理解することにつながると考えた。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、本研究では、分析対象時期および対象国を2000年以降のシリア、レバノン、パレスチナ自治区(イスラエル)、ヨルダンとし、研究代表者、分担者、および協力者が各国の資料・情報収集、検証・分析作業を分担することとした。

3年間の研究期間のうち、初年度は上記の「研究目的」で示した第1の課題、2年度は第2の課題、そして3年度は第3の課題を重点的に取り上げ、現地研究機関・研究者との協力関係やメディアの多角的利用を通じた資料・情報収集、検証・分析を進めた。研究分担者および協力者の意見交換・集約は、電子メールやコミュニティサイトなどを通じて行うとともに、詳細な進捗状況報告などを目的とした会合を開催し、研究計画・方法の調整を行った。またウェブサイトを作成し、研究成果を持続的に公開、その普及に努めるとともに、専門誌での研究成果を公刊した。

具体的には、対象地域である東アラブ地域を構成する国(シリア、レバノン、パレスチナ・イスラエル、ヨルダン)を基本単位とし、それぞれの国における資料・情報収集、検証・分析作業は分担制とした。シリアの非公的政治主体は青山(研究代表者)が、レバノンは末近(研究分担者)が、そしてパレスチナ自治区(イスラエル)は錦田(研究分担者)がそれぞれ担当した。またヨルダンおよび各国のパレスチナ人諸勢力に関しては、上記3名の統括のもと、日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館資料企画課の高橋理枝氏(研究協力者)、財団法人中東調査会研究員の高岡豊氏(研究協力者)、上智大学アジア文化研究所共同研究員の溝淵正季氏(研究協力者)に協力を依頼した。

4. 研究成果

各年度の研究成果は以下の通りである。

平成24年度はシリア、レバノン、パレスチナ(イスラエル)の三カ国の政情に「アラブの春」が与えた影響を把握するため、資料・情報を網羅的に収集・整理することに重点を置き、主に以下の活動を行った。

(1)研究会合：平成24年4、5、6、7、10、11、12月、25年1月に、東京外国語大学および立命館アジア太平洋大学(12月)で8回の研究会合を持ち、研究代表者、研究分担者、研究協力者の研究進捗状況報告、収集資料・データの解析結果検証などを行った。

(2)現地調査：平成24年8月、25年3月に研究分担者と研究協力者がレバノン、パレスチナ(イスラエル)を訪問し、現地の研究者・有識者との意見交換および関連資料・データ収集を行った。

(3)資料・データ収集およびその解析：東アラブ地域各国の政情や政治主体の営為に関する資料・データを現地調査とインターネット等を通じた日々の情報収集活動を通じて収集・解析した。

(4)成果普及：本研究の研究成果をホームページにアップロードし、成果普及に努めた。また「5.主な発表論文等」に列記する論文・論考を随時発表した。

平成25年度は、「アラブの春」以降台頭・再活性化した非政治主体の実態解明を試みるべく、主に以下の活動を行った。

(1)研究会合：平成25年6、8、10、12月、25年3月に東京外国語大学で5回の研究会合を持ち、研究代表者、研究分担者、研究協力者の研究進捗状況報告、収集資料・データの解析結果検証などを行った。

(2)現地調査：平成25年9月、26年8月に研究分担者と研究分担者がレバノンを訪れ、現地の研究者・有識者との意見交換および関連資料・データ収集を行った。

(3)資料・データ収集およびその解析：東アラブ地域各国の政情や政治主体の営為に関する資料・データを現地調査とインターネット等を通じた日々の情報収集活動を通じて収集・解析した。

(4)成果普及：本研究の研究成果をホームページにアップロードし、成果普及に努めた。また「5.主な発表論文等」に列記する論文・論考を随時発表した。

平成26年度は、過去2年間に収集、整理、解読した資料・情報、および成果を踏まえて、非公的政治主体が、東アラブ地域各国の紛争状況のなかでいかなる役割を果たしているのかを分析することに力点を置きつつ、主に以下の活動を行った。

(1)研究会合：平成26年5、8、10、12月、27年3月に東京外国語大学で5回の研究会合を持ち、研究代表者、研究分担者、研究協力者の研究進捗状況報告、収集資料・データの解析結果検証などを行った。

(2)現地調査：平成26年8月、10月、11月、27年3月に研究分担者と研究協力者がレバノン、パレスチナ(イスラエル)、英国、フランスを訪れ、現地の研究者・有識者との意見交換および関連資料・データ収集を行った。

(3)資料・データ収集およびその解析：東アラブ地域各国の政情や政治主体の営為に関する資料・データを現地調査とインターネット等を通じた日々の情報収集活動を通じて収集・解析した。

(4)成果普及：本研究の研究成果をホームページにアップロードし、成果普及に努めた。また「5.主な発表論文等」に列記する論文・論考を随時発表した。また平成27年1月、ISA-GSC 国際会議(シンガポール)にて“Levant in Transition: Regional Security, Social Development and the Global Order after the Arab Spring”と題したパネルを企画し、研究分担者、研究協力者が研究成果の国際発信に務めた。さらに3月に Gianluca Parolin 氏をエジプトから招聘し、シリアでの非公的政治主体「イスラーム国」の伸長について、イスラーム法学の視点から公開ワー

クショップで報告頂いた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計36件)

青山弘之「混迷するシリア情勢について(東西南北)」『青淵』(764)、2012年、pp. 14-16(査読無)

青山弘之「シリア：複雑化する紛争の絶望的未来(世界の潮)」『世界』(835)、2012年、pp. 20-24(査読無)

青山弘之「アラブ大変動への西側の躊躇も要因 = なぜシリアに春が来ない?」特集：中東の春のいま Janet Jiji Press、2012年6月20日 (<http://janet.jw.jiji.com/apps/contents/view/c3a823079ee6b3f5916baa64956d0890/20120620/00454/viewtemplate1?name=>)(査読無)

青山弘之「挫折の縁に立つ「シリア革命2011」」『世界』(832)、2012年 pp. 295-302(査読無)

青山弘之「シリア 武力紛争の二年半は何だったのか：欧米の思惑と跋扈するジハードイスト」『世界』(849)、2013年、pp. 236-242(査読無)

青山弘之「シリア紛争から3年：アサド政権と反体制勢力の暴力の応酬をめぐる「善」と「悪」」Asahi 中東マガジン、2014年3月18日 (<http://middleeast.asahi.com/report/2014031600001.html>)(査読無)

青山弘之「アサド政権にさらなるフリーハンド：和平会議「破綻寸前」の裏事情」e-World、2014年2月26日 (<https://janet.jw.jiji.com/>)(査読無)

青山弘之「せめぎ合いのなか友好的敵対に軟着陸したシリア和平会議」Synodos、2014年2月5日 (<http://synodos.jp/international/6953>)(査読無)

青山弘之「紛争下のシリアにおける政治構造の若干の変容(試論):「権力の二層構造」持続に向けた抜本的改革」『国際情勢紀要』(84)、2014年、pp. 183-196(査読無)

青山弘之「アサド大統領再選がシリアの紛争において持つ含意」『中東研究』(521)、2014年、pp. 14-28(査読無)

青山弘之「混乱を再生産するイスラーム国と欧米：その奇妙な親和性」『世界』(862)、2014年、pp. 145-153(査読無)

青山弘之「アサド政権を利する「イスラーム国」台頭：欧米の無力、さらに露呈」Janet e-World、2014年7月24日 (<http://janet.jw.jiji.com/apps/contents/view/f298664a0d09e5ced2e2b0a13d5d819c/20140724/00435/viewtemplate1?name=>)(査読無)

- 青山弘之「台頭する「イスラーム国」：欧米諸国の思惑と私たちの課題」『まなぶ』(692)、2014年、pp. 32-35 (査読無)
- 青山弘之「イスラーム国掃討にアサド政権必要：「退潮」機に全シリアで結束を」Janet e-World、2015年2月25日 (http://janet.jw.jiji.com/apps2/do/contents/view/3253baa25e3933064d14dd9ae56d94cb/20150225/382/viewtemplate1/janet_set) (査読無)
- 青山弘之「シリア反体制勢力の同質性と異質性：アル=カーイダ系組織、ジハード主義者、「穏健な反体制派」『国際情勢紀要』(85)、2015年、pp. 124-133 (査読無)
- 青山弘之「シリア・アサド政権はどのように必要とされているのか？」Synodos、2015年3月19日 (<http://synodos.jp/international/13439>) (査読無)
- 末近浩太「クサイルへの道：シリア『内戦』とヒズブッラー」『中東研究』(518)、2013年、pp. 54-65 (査読無)
- 末近浩太「シリア内戦入門」：シリア「内戦」の見取り図」Synodos (128)、2013年 (査読無)
- 末近浩太「シリア「内戦」の見取り図」Synodos、2013年8月28日 (<http://synodos.jp/international/5339>) (査読無)
- 末近浩太「シリア問題は世界に何を突きつけたのか」『現代思想』41 (17)、2013年、pp. 183-189 (査読無)
- ⑲末近浩太「アラブの春」から3年：中東地域研究の2013年」Synodos、(138/139)、2013年 (査読無)
- ⑳末近浩太「ヒズブッラーとは何か：抵抗と革命の30年」Synodos、2014年2月14日 (<http://synodos.jp/international/7006>) (査読無)
- ㉑末近浩太「現代の中東政治・イスラームに関する研究資料：研究動向・ニーズ・出版事情」『アジア情報室通報』12(3)、2014年、pp. 2-6 (査読無)
- ㉒末近浩太「序論 中東の政治変動：開かれた「地域」から見る国際政治」『国際政治』(178)、2014年、pp. 1-14 (査読無)
- ㉓末近浩太「暴力と憎しみのなかで何を語るべきか：シリアからフランス、日本へ」『現代思想』43(5)、2015年、pp. 204-210 (査読無)
- ㉔SUECHIKA Kota, "Undemocratic Lebanon?: The Power-Sharing Arrangements after the 2005 Independence Intifada." *Journal of Ritsumeikan Social Sciences and Humanities* (4), 2013, pp. 103-132 (査読無)
- ㉕錦田愛子「【パレスチナ】終わらない現実としてのパレスチナ」『地域研究』13 (2)、2013年、pp. 410-415 (査読無)
- ㉖錦田愛子「中東和平交渉の再開とパレスチナ難民の未来」Synodos、2013年9月19日 (<http://synodos.jp/international/5534>) (査読無)
- ㉗錦田愛子「ハマースをめぐる政治とガザ戦争」『中東研究』(522)、2015年、pp. 86-95 (査読無)
- ㉘錦田愛子「ハマースの政権掌握と外交政策」『国際政治』(177)、2014年、pp. 98-112 (査読有)
- ㉙錦田愛子「パレスチナ統一内閣の光と影：ファタハ・ハマース連立に課された課題」Synodos (Web 掲載)、2014年6月19日 (<http://synodos.jp/international/9289>) (査読無)
- ㉚錦田愛子「ガザ戦争の勝敗：ハマースとイスラエルの長期停戦合意」『Asahi 中東マガジン』2014年9月2日 (査読無)
- ㉛錦田愛子「オスロ合意と難民問題」今野泰三・鶴見太郎・武田祥英編『オスロ合意から20年：パレスチナ/イスラエルの変容と課題』(TIAS Middle East Research Series No.9) NIHU イスラーム地域研究東京大学拠点中東パレスチナ研究班、2015年3月16日、pp. 39-55 (査読無)
- ㉜NISHIKIDA Aiko and HAMANAKA Shingo, "Palestinian Migration under the Occupation: Influence of Israeli Democracy and Stratified Citizenship." *Sociology Study* 3(4), 2013, pp. 247-260 (査読有)
- ㉝YOKOTA Takayuki, SUECHIKA Kota and KIKKAWA Takuro, "Re-Configured Islamist Geopolitics after the Arab Spring: Emergence of New Islamic Community in Muslim Brotherhood's International Nexus." *Revisiting Islamism in the Middle East after the "Arab Spring,"* SIAS Working Paper Series No. 25, 2015, pp. 57-79 (査読無)
- [学会発表](計8件)
- 青山弘之「社会運動をあきらめた社会：「アラブの春」波及後のシリア」2013年度日本比較政治学会分科会 C「開発途上国の社会運動と政治」、2013年6月22日、神戸大学
- 末近浩太「グローバル不況と中東の政治変動」日本国際政治学会2012年度研究大会・共通論題「グローバル不況と政治変動」、2012/10/20、名古屋国際会議場
- 末近浩太「多宗派社会における国軍：レバノンの宗派制度と暴力装置」2013年度日本比較政治学会分科会 E「紛争と国家建設における軍・準軍事組織・治安機関の役割」、2013年6月22日、神戸大学
- SUECHIKA Kota, "The "Resistance Axis" and Its Implication for the Post-Arab Spring Middle East Regional (Dis)order." 日本中東学会第30回年次大会、2014年5月11日、東京国際大学
- SUECHIKA Kota, "Reconfiguring

Sectarian and National Identities in Lebanon: The Case of the Lebanese Armed Forces (LAF). ” The Fourth World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES), 2014年8月19日、Middle East Technical University (METU), Ankara, TURKEY

SUECHIKA Kota, “Nation Building and National Army in Deeply Divide Society: A Case of Lebanon.” Panel SD-1 “Levant in Transition: Regional Security, Social Development and the Global Order after the Arab Spring,” ISA Global South Caucus Conference 2015, Singapore, “Voices from Outside: Re-shaping International Relations Theory and Practice in an Era of Global Transformation”, 2015年1月10日、Singapore Management University, SINGAPORE

NISHIKIDA Aiko, HAMANAKA Shingo, “Palestinian Migration under the occupation: Comparative study about the residents of the West Bank, Gaza Strip and East Jerusalem.” 12th International Conference: “Migration and Democracy”, Centre de Documentation sur les Migrations Humaines, 2012年6月14日、Rathaus der Stadt Dödelingen, LUXEMBOURG

錦田愛子・溝淵正季・高岡豊・濱中新吾「レバノン在住パレスチナ人にみられる越境移動と政治意識:2012年世論調査に基づく比較分析」日本中東学会第29回年次大会、2013年5月12日、大阪大学

〔図書〕(計11件)

青山弘之『混迷するシリア:歴史と政治構造から読み解く』岩波書店、2012年、142 pp.

黒木英充編『シリア・レバノンを知るための64章』明石書店、2013年、440 pp.

酒井啓子編『中東政治学』有斐閣、2012年、292 pp.

佐藤章編『紛争と国家形成:アフリカ・中東からの視覚』JETRO アジア経済研究所 2012年、252 pp.

末近浩太『イスラーム主義と中東政治:レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』名古屋大学出版会、2013年、480 pp.

福原裕二・吉村慎太郎編『現代アジアの女性たち:グローバル化社会を生きる』新水社、2014年、376 pp.

堀内正樹編『<断>と<続>の中東:非境界の世界を遊ぶ』悠書館、2015年、419 pp.

松本弘編『現代アラブを知るための56章』明石書店、2013年、328 pp.

三尾裕子・床呂郁哉編『グローバルイゼーションズ:人類学、歴史学、地域研究の現場から』弘文堂、2012年354 pp.

吉川元・中村覚編『中東の予防外交』信山

社、2012年、384 pp.

渡邊直樹編『宗教と現代がわかる本2013』

平凡社、2012年298 pp.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

「現代東アラブ地域情勢研究ネットワーク」
(<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/aljabal/biladalsham.htm>) および「シリア・アラブの春顛末期」
(<http://syriaarabspring.info/>)

6. 研究組織

(1)研究代表者

青山 弘之 (Hiroyuki Aoyama)

東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

研究者番号: 60450516

(2)研究分担者

末近 浩太 (Kota Suechika)

立命館大学国際関係学部教授

研究者番号: 70434701

錦田 愛子 (Aiko Nishikida)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授

研究者番号: 70451979

(3)連携研究者

()

研究者番号: